

## 還相回向の課題

——特に、「還相の利益は利他の正意を顕すなり」の確認を通して——

廣 瀬 惺

はじめに

親鸞は、主著『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』と略す）の本文を、

謹んで浄土真宗を按ずるに二種の回向有り。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証<sup>(1)</sup>あり。

との文をもって書きはじめている。そのことによっても明らかのように、親鸞にとって往相・還相の二種回向はその仏道の根幹をなすものであり、親鸞自身の救いにとって不可欠なものであったことはいうまでもない。しかし、往相回向はともかくとして、還相回向については、親鸞が言うほどの不可欠性を持った了解がなされていないのが実状であるといわなければならない。そこで今日、さまざまな立場から親鸞の還相回向観に対して問題提起がなさ

れ、また検討が加えられつつある。私自身もこれまで種々論じてきた。しかし、いま一つ十分なうなづきとなつてこないのである。それは何故なのか。確かに、親鸞の二種回向についての表現上から来る了解の困難さにもよるであらう。しかし、それ以上に、あるいはそれに先立つこととして、親鸞にとつてどのような課題が二種回向、なかならず還相回向によつて応えられていたのかの確認の不明確さにあるといえるのではないだろうか。その一点さえ明らかにされるならば、親鸞の一見難解とも思われる表現の表している意味もそこから解かれていくのではないだろうか。そこで、本論文においては、今一度出发点へ返つて、親鸞にとつて二種回向、なかならず還相回向がどのような課題に應えるものとして不可欠性を持つて見出されていたのかを尋ね、もつて、親鸞の二種回向觀をより明確ならしめたいと思う。

## 一

そのような問題関心に立つて親鸞の還相回向觀を尋ねようとする場合、特に注目させられる親鸞の言葉は、何よりも置かれている位置からいって、『教行信証』「証卷」末尾の、

還相の利益は、利他の正意を顯すなり。<sup>(2)</sup>

の文である。そこで、この言葉を中心に考察を加えることとしたい。

ここでまず注意されるのが、「還相の利益」と言われていることである。還相を直接的に「利益」という言葉で

押さえられているのは、他にも、まず「証卷」において還相回向の一段を開いていこうとする冒頭に、

二つに還相の回向というは、則ち是れ利他教化地の益なり。<sup>(3)</sup>

といわれ（『浄土文類聚鈔』も同じ）、また『正像末和讃』では、

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳廣大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり<sup>(5)</sup>

と、還相回向への回入が往相回向の利益として讃<sup>2</sup>われている。そのように、還相回向が「利益」といわれているかぎり、還相回向が衆生を離れて何処かにあるという話ではないことは明らかである。還相回向によつて衆生の課題が応えられればこそ、還相回向が「利益」といわれるのである。

そして、さらに、その「還相の利益」が「利他の正意を顕すなり」といわれているのである。「正意」とは本意と言い換えてもよいであろう。そうすると、ここで還相の利益を衆生に与えることこそが利他、即ち本願他力の本意であるといわれているのである。この言明は重い意味を持っている。本願の意を決定する言辞だからである。そこには、当然親鸞自身の宗教体験と宗教的思索の裏付けがあることはいうまでもないが、それだけではなく、親鸞自身の体験・思索をさらに裏付け、根拠付けるものがなければならないと思われる。そのように考えるとき、この親鸞の言明に深く呼応する文を、親鸞が『教行信証』『証卷』に還相回向の文として延々引文する『論註』の文の中に見出すことができる。即ち、それは、

未証淨心の菩薩とは、初地已上七地以還のもろもろの菩薩なり。此の菩薩、亦能く身を現ずること、もしは百、

もしは千、もしは万、もしは億、もしは百千万億、無仏の国土にして仏事を施作す。かならず心を作して三昧に入りて、いましよく作心せざるに非ず。作心を以ての故に、名づけて未証淨心とす。此の菩薩、安樂淨土に生まれて、即ち阿弥陀仏を見んと願ず。阿弥陀仏を見る時、上地のもろもろの菩薩と、畢竟じて身等しく法無し、と。龍樹菩薩・婆薮般豆菩薩の輩、彼に生まれんと願ずるは、当に此の爲なるべしならくのみと。<sup>6)</sup>

との文である。

ここで、曇鸞は（ということとは、この文を引いている「親鸞自身は」ということもある）、龍樹・天親の願生の必然的理由を決定しているのである。曇鸞及び親鸞は、龍樹・天親との深い感応の中で自らの願生の必然性を尋ね当てることを通して、龍樹・天親の願生の必然性を決定しているのである。そして、この文を受けて、親鸞は「還相の利益は利他の正意を顯すなり」と明言することができたのである。

では、龍樹・天親の願生の必然性として押さえられている内容は何かということであるが、それは、利他教化における「作心」の超克という課題である。「作心」という問題については、また稿を改めて論じなければならないが、ここではともかく、利他教化の課題に應える道として願生道が龍樹・天親にとって必然性を有する道として押さえられているのである。そうであるならば、親鸞がこの文と呼応して「還相の利益」といつている利益の内容は、「作心」を超克せしめ、利他の課題が還相回向として応えられることを表しているといわなければならないであろう。

還相回向が利他の課題に應えるものであることを表している親鸞の言葉として、他に親鸞晩年の作である『如来二種回向文』の文を挙げることができるであろう。『如来二種廻向文』で親鸞は、まず往相回向について述べてきて、

その一段を、

これらの大誓願を往相の回向とまふすとみえたり。<sup>(7)</sup>

と結び、つづいて還相回向について述べて、その一段を、

これは如来の還相回向の御ちかひなり。<sup>(8)</sup>

と結ぶ。そして、最後にそれら全体を受けて、

自利・利他ともに行者の願樂にあらず、法藏菩薩の誓願なり。<sup>(9)</sup>

と記しているのである。ここで親鸞は、「法藏菩薩の誓願なり」と記して、述べてきたことの全体が、法藏菩薩の本願によるものであると言っているのであるが（その事の意味は後述する）、ともかく往相回向によって自利の課題が応えられ、還相回向によって利他の課題が応えられると明確に述べているのである。そのことによって、還相回向を利他の課題に應えるものとして親鸞が見出していたことは間違いないといわなければならないであろう。

そうであるとするなら、親鸞の還相回向觀を了解するには、利他とはどのような課題であるのかをも含めて、利他の課題が自己にとって必然的な課題であることを徹底して明らかにすることにあるといわなければならないであろう。そのことを抜きにして、親鸞が還相回向に見出した意義に十分触れることはできないのではないか。そして、それはとりもおさず、大乘仏教が人間の根本課題を自利利他の円満成就に見出してきた意を単に教理上の問題としてではなく、自己・人間にとっての不可欠の課題であることを明らかにすることに外ならないのである。

そのように尋ねてくるなら、浄土教においても、龍樹以来常に自利利他の成就が課題とされてきたことに思いを

いたさなければならぬであろう。今、二―三確認をしておくなら、曇鸞の『論註』は一貫して、利他の課題に應えるものとして、力を尽くして阿弥陀の本願が尋ねられている。自利に偏した二乗性をどう克服するのかという問題である。例えば、二十九種莊嚴の眼目である不虛作住持功德莊嚴については、次のように註解されている。

仏も何が故ぞ此の莊嚴を起こしたまふと。有る如来を見そなわずに、ただ声聞を以て僧とす。仏道を求むる者無し。或いは仏に値ひ、而れども、三途を勉めざる有り。善星・提婆達多・居迦離等は是れなり。また人、仏の名号を聞きて無上道心を発せども、惡の因縁に遇ひて、退して声聞・辟支仏地に入る者あり。是の如きらの空過の者、退没の者有り。是の故に願じて言わく、我れ成仏せん時、我れに値遇せん者、みな速疾に無上大宝を満足せしめん、と。<sup>(10)</sup>

ここで、墮三惡道と墮二乗を超えしめるものとして本願力が尋ねられているのである。

また、善導・法然においても、往生の後に穢土に帰って利他教化するという還相的表現が散見されることも注意されなければならない。例えば、周知の如く善導は回向發願心釈において、

又回向と言うは、彼の国に生じ已りて、還りて大悲を起こして、生死に回入して、衆生を教化する、亦回向と名づくるなり。<sup>(11)</sup>

と述べている。また、法然は随所で述べている。たとえば、

かかる不信の衆生のために、慈悲をおこして利益せむとおもふにつけても、とく極樂へまいりて、さとりひらきて、生死にかへりて、誹謗不信のものをわたして、一切衆生あまなく利益せむとおもふべき事にて候也。<sup>(12)</sup>

とくとく浄土にむまれて、さとりをひらきてのち、いそぎこの世界に返りきたりて、神通方便をもて、結縁の人も無縁のものをも、ほむるをもそしるをも、みなことごとく浄土へむかへとらんとちかひをおこしてのみこそ、当時のところをもなくさむる事にてそうろう。<sup>(13)</sup>

とある。法然においては、願生の目的として、穢土への還相による利他教化が挙げられているといってもよいほどである。いかに、利他の課題が人間の救済にとって不可欠な課題として見出されていたかということである。

親鸞はそのような大乘仏教の、また浄土教の自利利他円満成就を課題とする仏教の流れの中で、人間としての自己の全き救済を徹底して本願に聞き開いていく歩みを通して、凡夫を機とする本願の究極の願意が利他の課題に應えるところにあることを感得したのであらう。そして「還相の利益は利他の正意を顕すなり」と、『証卷』の結びに記したのである。その文には、弥陀の願意をその極みにまで尋ね当て、また大乘仏教の提起してきた課題に遂に應えて人間としての全き救いに領きえたことに対する親鸞の確信がこめられているといえるであらう。

## 二

以上の如く、還相回向を利他の課題に應えるものとして親鸞が見出していたとして、そのことの意味をさらに了解する上で、明らかにしておかなければならないことがある。それは、親鸞にとって二種回向とは基本的にどうい

うことであつたのかという問題である。その問題については、私は、これまでも親鸞の二種回向の表現を通して見た場合、親鸞には如来に属する根本的側面からの二種回向の表現と、その如来の二種回向によつて衆生に与えられる功德の側面としての二種回向の表現との二側面からの表現があるということを述べてきた。<sup>(14)</sup>即ち、根本的には回向そのものは如来の衆生救済の働きとしての二相であるということであり、その働きにおいて、そのまま衆生に往相・還相の二相が功德として与えられるということである。

二種の回向が、根本的に如来の衆生救済の働きであるということについては、『教行信証』の「信巻」の欲生心釈で引文されている『論註』の二種回向の文の親鸞の讀みに端的に表されている。次のごとくである。

『浄土論』に曰わく、云何が回向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまえり。回向に二種の相有り。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道にむたえしめたまうなり。若しは往・若しは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんが為に、とのたまえり。このゆえに「回向為首得成就大悲心故」と言えり、と。已上<sup>(15)</sup>この文をもって、二種回向が衆生救済の如来の働きであることは十分納得されることである。もつて私は、二種回向の根本は、智慧の如来が苦悩の衆生を発見することを通して本願の如来として十方群生海の根底に自己を表現する相を還相回向、衆生の根底に表現した如来が衆生とともに浄土に往生しようとする相が往相回向であると了解す



るのである。さらに、その事を表している文として、次の親鸞の消息を挙げておきたい。

法身とまふす仏のさとりをひらくべき正因に、弥陀仏の御ちかいを、法蔵菩薩われらに回向したまへるを、往相の回向とまふすなり。この回向せさせたまへる願いを、念仏往生の願とはまふすなり。この念仏往生の願を、一向に信じてふたごころなきを、一向専修とはまふすなり。如来の二種の回向とまふすことは、この二種の回向の願を信じ、ふたごころなきを、真実の信心とまふす<sup>16</sup>。

ここで親鸞は、「この念仏往生の願を、一向に信じてふたごころなきを、一向専修とまふすなり。」と記して、次に「如来の二種の回向とまふすことは、」との文を置いて、「この二種の回向の願を信じ、ふたごころなきを、真実の信心とまふす。」と記している。この文章展開は一見唐突のようにみえる。しかし、決してそうではないのであろう。「念仏往生の願」が、さらに「二種回向の願」と言い換えられているのである。即ち、念仏往生の願は、ここで「この念仏往生の願を、一向に信じてふたごころなきを、一向専修とまふすなり。」の前に「法蔵菩薩われらに回向したまへるを、往相の回向とまふすなり。この回向せさせたまえる願を、念仏往生の願とはまふすなり。」といわれているように、当面は往相回向の願である。しかしその願は、それに先立って「阿弥陀仏の御ちかいを、法蔵菩薩われらに回向したまへる」といわれているように、果成の阿弥陀仏が法蔵菩薩となつて、ということは弥陀が法蔵菩薩に還相して、衆生に往相回向したまえる願なのである。だから、親鸞は「この念仏往生の願を、一向に信じてふたごころなきを、一向専修とまふすなり。」と最初には言い、次いで、一見唐突であるかの如くであるが、「如来の二種の回向とまふすことは」との文を置いて、その内容（即ち、「この念仏往生の願を、一向に信じてふたごこ

ろなきを、一向専修とまふすなり。」をさらに言い換えて、「この二種の回向の願を信じ、ふたごろなきを、真実の信心とまふす。」と言っているのであろう。往相回向の願である念仏往生の願は、そのもと如来の還相回向に基づいているゆえに、「この二種の回向の願」と、言い換えられているのである。

そのように、二種回向が如来の衆生救済の働きとしての二種相であると了解できるなら、先に述べた、往相回向によつて衆生の自利の課題が応えられ、還相回向によつて衆生の利他の課題が応えられるということは、如来の往相回向によつて自利の課題が応えられ、如来の還相回向によつて利他の課題が応えられるということを意味している。どこまでも衆生と共に救われようとする如来の往相回向として自利の課題が応えられ、また衆生の根源に自己を表現し、現に衆生の根源に働く如来の還相回向の働きによつて利他の課題が応えられるということである。

## 三

以上の如く親鸞の二種回向觀を了解し、また「証卷」結びの「還相の利益は利他の正意を顯すなり」との文の意の考察を中心として、親鸞が、自利利他の課題に応えるものとして如来の二種回向を受けとめていたということが出来るなら、親鸞が『教行信証』の本文冒頭に、

謹んで浄土真宗を按ずるに二種の回向有り。一つには往相、二つには還相なり。<sup>(17)</sup>

と記している意は自ずからに明らかとなるであらう。また、信心の獲得について、『教行信証』の「別序」に、

夫れ似んみれば、信樂を獲得する事は如来選択の願、心自り發起す<sup>(18)</sup>。

と記される如く、「如来選択の願心によりて」、あるいは「本願によりて」でいいところを、

如来の二種の回向によりて、真実の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆへに、他力とまふすなり。<sup>(19)</sup>

と、敢えて「如来二種の回向によりて」と言い、さらにまた、次の如く本願との値遇の慶びを表現するのに、

如来二種の回向を　ふかく信ずるひとはみな

等正覺にいたるゆへ　憶念の心はたえぬなり<sup>(20)</sup>

往相還相の回向に　まうあわぬ身となりにせば

流轉輪廻もきはもなし　苦海の沈淪いかがせん<sup>(21)</sup>

無始流轉の苦をすてて　無上涅槃を期すること

如来二種の回向の　恩徳まことに謝しがたし<sup>(22)</sup>

聖徳王のおわれみに　護持養育たへずして

如来二種の回向に　すすめいれしめおはします<sup>(23)</sup>

等と述べて、「本願」、あるいは「本願力の回向」で十分と思われるところを、「如来二種の回向」・「往相還相の回向」等とわざわざ確認をするかのごとく記している意も明らかとなるであろう。即ち、根本的には如来の衆生救済の働きが往相・還相の二種回向としての働きであることをおさえているものであろうが、それに止まらず、自利利他円満成就を課題としてきた大乘仏教・浄土教の歴史の意に深く触れながら、また自らの徹底した求道の歩みを通した掘り下げによって、人間・自己の全き救いが自利利他の円満成就にあることを確認してそのような表現をとっているのではないであろうか。そして、大乘仏教が課題としてきた自利利他という問題が、如来の回向によって始めて円満成就するものであることを示すものであると言えるであろう。衆生の上に自利利他の救いを満足せしめる働きとして如来の回向を二種の回向と確認をして表現しているのである。衆生の自利の課題に応えるのが如来の往相回向であり、利他の課題に応えるのが如来の還相回向である。

#### 四

以上の如く、往相回向・還相回向が如来の二種の回向として、衆生の自利利他の課題に応えるものであることを尋ねてきたが、それでは、そのことが一人の念仏者の上においてはどのように証されるのであろうか、そのことを尋ねておきたい。

迷いのほかない凡夫の身である我々においては、どこまでも、まず自利の課題に応える往相回向の本願を頂いて

いくほかはないであろう。その意味において、利他の課題に應える還相回向の世界は、念仏者にとっては往相の証果の光の中に見出される如来による利他満足の世界であるといわなければならない。そこに、『教行信証』において還相回向が往相回向の証果を明らかにする「証卷」に内包されて説かれている所以がある。往相回向の願との値遇によって往相の証果が自己を超えて念仏者に開かれる。その事において、自己の上に往相の証果を開きつつある往相回向の願のより根源に、より深い本願の意義として還相回向の本願としての利他救済の意義を本願に見出したということである。さらに、そのことを念仏者の宗教体験に即していえば、往相回向の本願との値遇は、罪悪生死の自己一人を救う働きとしての本願との値遇であり、還相回向の本願との値遇は十方衆生を救おうとする働きとしての本願との値遇であると言ひ換えてもよいであろう。

親鸞は、第二十二願還相回向の本願について「大」の一字を付けて記することが多い。『浄土三経往生文類』において、「大慈大悲の願」<sup>(24)</sup>といい、また、『如来二種廻向文』においても、「大願」<sup>(25)</sup>・「大慈大悲誓願」<sup>(26)</sup>、同じく『浄土文類聚鈔』でも、「大慈大悲の弘誓」<sup>(27)</sup>と記している。親鸞は往相回向の願についても、確かに、例えば『如来二種廻向文』に、

これらの大誓願を、往相の回向ともうすとみえたり。<sup>(28)</sup>

というように「大誓願」という例はある。しかし、往相回向の願について「大」を付けて表する例は還相回向の願に比して数が限られている。第二十二還相回向の願については、より意識的にいわれているといえるのである。そのことは還相回向としての本願の意義が、より深く十方衆生を救う本願として親鸞において確認されていたことに

よるのではないであらうか。因みに、『教行信証』の「行巻」には、

一切衆生の為に仏道を求むるが故に、名づけて「大」<sup>(29)</sup>とす。

とある。

そして、今一つ大切な事は、還相が「利益」といわれているところには、阿弥陀の本願による利他満足の世界が還相回向の世界であり、そこに衆生の利他の願いが応えられることが根本であるが、そのことにとどまらず、その十方衆生を救済せんとして活動する阿弥陀の還相回向の本願に応同するという意義が念仏者としての往相道を歩むものの上に開かれることをも含んでいるといわなければならないということである。それは、如来の往相回向によって衆生が往生せしめられていくのと同じく、如来の還相回向の願心に目覚めた衆生が如来の利他成就の願心の活動に参入せしめられていくということである。「証巻」に内包して説かれている還相回向の文はそのような世界を語っているといえる。<sup>(30)</sup>そして、そのことについては、親鸞が、『高僧和讃』の、

弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ<sup>(31)</sup>

との、「還相」の左訓に、

くあんさうはしやうとにまいりはてはふけんのふるまいをせさせてしゆしやうりやくせさせんとゑかうしたまへるなり

と述べ、また、『正像末和讃』で次のように和讃しているところである。

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり

往相回向の大慈より 還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば 浄土の菩提はいかがせん<sup>(32)</sup>

最初の和讃において親鸞は、往相回向の利益として還相回向に回入するというのである。それは、往相回向の証果の光のなかに、如来の還相回向の働きに参入せしめられていくことを讃するものであるといえる。そして、さらにかさねて、「往相回向の大慈より 還相回向の大悲をう」として、往相回向の大慈について、『論註』に、  
えられるというのである。その「大慈」・「大悲」については、『論註』に、

苦を抜くを慈と曰う、樂を与えるを悲と曰う<sup>(33)</sup>

と示されるところである。その『論註』の解釈に照らせば、往相回向によって私（我が身）の苦が抜かれ、還相回向によって「樂」が与えられるということである。その樂とは、まさに人間として生きることの意味が与えられることではないであろうか。それは、如来の還相回向の本願に応同して仏の事業に参加せしめられていくという無上の意義である。そこに、「往相回向の大慈より 還相回向の大悲をう」と讃われているのであろう。

## おわりに

以上、親鸞が『教行信証』の本文冒頭を始めとして、随所に二種回向について記するほどに二種回向が親鸞の仏教にとって不可欠である意義について、特に還相回向がどのような課題に応えるものとして親鸞に見出されていたのかを、「証卷」結びの「還相の利益は利他の正意を顕すなり」の言葉の意味を尋ねることを通して論究してきた。

還相回向、それはどこまでも衆生の現実を超越した如来が衆生の現実界へ自己を表現し、衆生の上に往相回向を開こうとして活動する相である。その如来において、衆生一人一人の上に往相道が如来の往相回向として開かれていくのである。そして、その往相道が開かれた衆生はそこに止まるものではない。どこまでも関わりを生きるものとして、自己の往相の根源に、十方衆生を救おうとして還相したまえる如来の本願の心を感じ得ていくのである。そこに、はじめて衆生としての自己が抱えている利他の課題が本願によって満足されていくのである。そしてそのことは、さらにその願心に応同していく生活を利益として与えられていくことである。その意味からするなら還相回向の本願の意義は、衆生にとっては往相回向の本願のさらに根源に見出される本願のより深い意義であるともいえよう。親鸞は往相回向の本願との出会いを通してさらにその根源的な本願の意義として、還相回向の本願の意義を見出したのである。

そしてそのような二種回向の本願との生きた出遇いの表現を、私は、『歎異抄』に記されている、聖人の常の仰



せに頂くのである。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。<sup>(34)</sup>

あえて分割するなら、「親鸞一人がためなりけり」までが往相回向の願として本願をいただいておられるのであり、続いて「されば」から以降が、さらにその本願の意義を掘り下げて、十方衆生を救わんとする本願として還相回向の意義を有する本願の心に感応していつておられるのであらう。「そくばくの業」という表現は、単なる個人性を破って十方衆生の地平において言える言葉である。そして、ここで大切なことは、親鸞が「かたじけなさよ」という謝念の表明を、「親鸞一人がためなりけり」の後ではなく、「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願」まで述べ切ったところで表明していることである。そこまできて、はじめて親鸞は本願に完全に値遇し、全き救いを了受することが出来たのではないであらうか。そして、そこには十方衆生を救わんとする還相回向の本願に参入している親鸞がいるのである。

(註)

- (1) 『定本親鸞聖人全集』一一九頁
- (2) 『定本親鸞聖人全集』一一二三頁
- (3) 『定本親鸞聖人全集』一一二〇一頁
- (4) 『定本親鸞聖人全集』二(漢文篇)一一三七頁
- (5) 『定本親鸞聖人全集』二(和讃篇)一一八三頁

還相回向の課題

- (6) 『定本親鸞聖人全集』一―二〇三頁
- (7) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二九頁
- (8) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二〇頁
- (9) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二〇頁
- (10) 『定本親鸞聖人全集』八(加點篇) 上―五二頁
- (11) 『定本親鸞聖人全集』一―一二頁
- (12) 『定本親鸞聖人全集』五―三六一頁
- (13) 『真宗聖教全集』四―七四九頁
- (14) 『定本親鸞聖人全集』一―一二八頁
- (15) 『同朋仏教』第二〇・二二合併号所載、拙稿「親鸞の二種回向觀」参照。教証としてあげている文に対する解釈については若干の訂正を加えなければならない部分もあるが、論旨そのものには変わりはない。
- (16) 『定本親鸞聖人全集』三(書簡篇) 一―二二頁
- (17) 前出
- (18) 『定本親鸞聖人全集』一―九五頁
- (19) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二八頁
- (20) 『定本親鸞聖人全集』二(和讀篇) 一―七〇頁
- (21) 『定本親鸞聖人全集』二(和讀篇) 一―八一頁
- (22) 『定本親鸞聖人全集』二(和讀篇) 一―八二頁
- (23) 『定本親鸞聖人全集』二(和讀篇) 一―二〇七頁
- (24) 『定本親鸞聖人全集』二(漢文篇) 一―三七頁
- (25) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二〇頁
- (26) 同上
- (27) 『定本親鸞聖人全集』二(漢文篇) 一―三七頁
- (28) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一―二九頁

- (29) 『定本親鸞聖人全集』 一―二九頁
- (30) 『真宗研究』 第三七輯所載 拙稿「親鸞の還相回向觀」 参照
- (31) 『定本親鸞聖人全集』 二(和讃篇) 一―九三頁
- (32) 『定本親鸞聖人全集』 二(和讃篇) 一―一八三頁
- (33) 『定本親鸞聖人全集』 一―二一六頁
- (34) 『定本親鸞聖人全集』 四(言行篇二) 一―三七頁